



主な内容

特集——岩手医科大学報発刊第500号記念
 トピックス——認知症ケアチーム室が発足しました
 3学部合同学生セミナーが行われました
 平成30年度事業計画
 フリーページ——すこやかスポット薬学講座No.8
 「薬学における微生物」
 「表紙写真：医用画像情報センター撮影」





特集

岩手医科大学報発刊第500号記念

～ 岩手医科大学報編集委員から500号に寄せて～

岩手医科大学報 発刊第500号を祝す

大学報編集委員会 編集委員長 **小川 彰**
(学校法人岩手医科大学 理事長)

岩手医科大学報がついに第500号となった。誠に嬉しい限りである。創刊は昭和34年6月5日「岩手医大月報創刊号」として発刊された。第4代学長篠田紘先生の手によるものである。

篠田紘先生は昭和31年4月学長に就任され、講座の拡充をはじめとして、歯学部、教養部設置という整備拡充計画を策定され、奔走していた頃である。この努力の結果、歯学部、教養部は昭和40年4月に開設された。東北北海道初の歯学部を持つことにより、「頭からつま先まで人体の全てを診る教育体制が完成した。」と喜んだとされている。

一方、大堀勉前理事長により総合移転整備計画基本構想が策定され、平成19年薬学部が設置された。平成21年には「岩手医科大学報発刊400号、発刊50周年を祝う」との巻頭言を大堀勉先生から頂いている。会報の重要性と必要性を痛感した大堀勉先生は「岩手医大月報」を「岩手医科大学報」と名称を改められ、学報の充実にご努力され、現在の形に作り上げられた。

大堀勉前理事長時代の発刊400号から、今回の発刊500号までの間には、PET・リニアック先端医療センター、7Tの超高磁場先端MRI研究所開設など発展を重ねてきた。平成23年の3・11大災害を経て、災害時地域医療支援教育センター開設、関連して災害医学講座、いわてこどものケアセンターの新設、災害を見据えたエネルギーセンターも竣工し、矢巾キャンパスへの附属病院移転、内丸メディカルセンター開設が来年に迫っている。昨年には念願の看護学部がスタートし、名実ともに「医療系総合大学」として発展しつつある。

篠田紘先生の創刊号一発刊のことばーには、「この間内部機構も拡大し、複雑になってきた、各部局の縦の連絡を一層完全にする他に、お互いの横の連絡を益々密接にする必要がある。」とある。今や職員約3,000名、学生

数2,300名超の大所帯に拡大した現在の組織においては、更に正確な情報共有が重要である事を自覚し、知恵を出し合うことが求められている。この岩手医科大学報を通して、大学全体がさらに活性化することを期待する。



災害時地域医療支援教育センター マルチメディア教育研究棟落成を伝える記事 (vol.440)



附属病院新築工事の概要についての特集 (vol.486)

大学報発刊第500号を記念して、そして発刊60周年に向けて

大学報編集委員会 編集副委員長 影山 雄大
(財務部 経理課)

大学報編集委員会では、これまでにA4版への拡大、全ページカラー、そして月刊化など、より良い大学報となるよう様々な取り組みを重ねてまいりました。そして、ここに至り大学報は遂に発刊500号にたどり着きました。私が就職した際に受け取った、アッサリした作りの月報とは別物に生まれ変わったと言っても、決して大げさではないと思います。

編集委員会の最初期メンバーとして長らく大学報に係らせていただき、これまでに多くの出会いと気づきがありました。様々な職種の方と意見を交わすなかで、私たちが力を合わせて同じ方向を目指す、組織の一員であることも強く感じたところです。

編集委員の一番の醍醐味は、やはり大学報が職場に届く時でしょう。すでに校正段階で原稿を読んでいますから、手に取らなくとも何処に何が書かれているかは分かっています。職場の仲間がページをめくるたび、私は(あ、その記事おすすすめ!) (いや、そこを読みとばしたら勿体ない……) と、心の中で呟くことになるのです。皆さんのお近くにいる編集委員も、きっと同じ思いでいることでしょう。手塩にかけた大学報、ぜひ隅々までお読みください。

結びとなりますが、事務局をご担当頂いている企画調整課の皆様、編集委員会でお出された難題を、いつも見事

に解決して下さる河北印刷の皆様、本当にありがとうございます。ここまで充実した大学報を毎月発行できるのは、陰ながら支えて下さる方々のお力添えがあってこそです。

大学報は来年6月に発刊60周年を迎えます。今後も現状に満足することなく、職員の皆様に寄り添った誌面を目指していきたいと思ひます。ご支援の程よろしくお祈い申し上げます。



執筆した教職員レター



表紙 (vol.469)

大学報発刊第500号記念に寄せて

大学報編集委員会 編集委員 齋野 朝幸
(解剖学講座 細胞生物学分野)

この度は大学報発刊500号記念誠にありがとうございます。私の様な未熟者がこのような文章を書くことは誠におこがましいのですが、今まで心に残っていることをいくつか書かせていただきます。

最初に大学報の編集委員をお引き受けいたしましたのは、当時超高磁場MRI研究施設に所属していました吉岡芳親先生(現大阪大学教授)の後任として、平成20年3月です。その当時、岩手医科大学報の編集委員長を故大堀勉理事長が務められておりました。一番記憶に残っているのは、編集委員会での思い出です。大堀先生は私たちにいろんな話を編集委員会の度になされておりました。先生の熱弁は1時間ほどかかることもありました。その時の大学報に対する大堀先生の熱意には感銘を覚えました。その当時、大学報は今の様な月報ではありませんでした。そのことを大堀先生は甚くお嘆きになっておられ、『記事は、事務任せにしていたり、先方への一度の依頼ぐらいでは集まらない。しつこく催促し、自分から進んで記事を集めに行かなければいけない』といつもお話になられていたことを思い出します。自分が、先生のおっしゃられた様に積極的に記事を集めたり、編集についてがんばっているかは全くもって疑問ですが、大堀先生の遺志を継

ぐ様今後も努力する所存です。

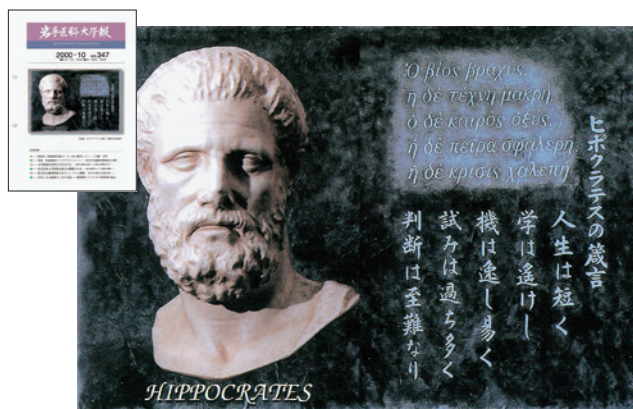
また、数度大堀先生を囲んでのお誕生会や忘年会にも出席させていただきました。その時の先生のご様子が、普段の威厳ある感じとは違い、気さくに私達編集委員とお話し下さったのも良い思い出です。

今後も引き続き、大学報が発刊600号、700号と続いていくことを祈念し、筆を置かせていただきます。



大堀前理事長を囲んでの忘年会

1999年(平成11年)のはじめ、当時の企画部長・和合さんから、本誌編集委員会に加わって欲しいと連絡があった。和合部長は、私が当時の教養部に助手として着任した際に事務室長をされており、大変世話になった方である。編集委員長は当時の理事長・学長故大堀勉先生であり、なぜ助手の私がと和合さんに質問したところ、委員会の開催日が教養部の会議と重なっており、会議に出る必要のない助手の先生にお願いしたいと言う。また、編集体制を見直している最中であり、様々な部署からの人材を集め、教員の委員には、教員への原稿依頼や特集の企画等をお願いしたいとのことであった。それ以後、私の任務は万難を排して委員会に出席することと、特集等の内容充実に努めることになった。委員会では、大堀先生を前に担当号の構成やゲラ刷りについて説明しなくてはいけないので、大変緊張したものである。その一方、大学運営や教育に関する大堀先生のお話や、様々な立場の委員の皆さんとの意見交換は、とても新鮮で、多くの「気づき」を与えてくれた。最初の頃の担当としては、2000年10月のvol. 347が印象深い。この号では、特集「医療事故とリスクマネジメント」を組み、当時、医療事故防止対策委員長をされていた高次救急センターの故谷口繁先生、ならびに教養部長をされていた法学科の菅野耕毅先生に直接原稿をお願いしに参上した。両先生ともに快く執筆を引き受けて下さり、教授室に伺った際には教育・研究に関する会話が弾み、感激した覚えがある。この号の表紙は、医学部会議室にあるヒポクラテスの頭像と、当時の教養部前庭にあった「ヒポクラテスの木」の植樹記念碑に刻まれた「箴言」(日本語訳:石渡隆司本学名誉教授)の合成写真で、当時の写真室(現 医用画像情報センター)の高橋幹夫技師長が作成したものである。



2000年10月号 (vol. 347) 表紙写真



2008年6月号 (vol. 392) 表紙写真

ヒポクラテスの木と「箴言」の碑は矢巾キャンパスに移され、岩手山を背景にした写真が2008年6月のvol. 392の表紙を飾っている。

そして、同年8月のvol. 393の表紙は、ヒポクラテスの木の横に新たに設置された碑の除幕式であり、当時の学長の小川理事長、医学部長であった小林副学長、歯学部長であった三浦副学長のお姿もある。その碑には大堀先生が揮毫された「一座建立」が刻まれており、今はその北側に新病院が建設されている。「一座建立」には、能楽と茶道における意味があるとのことだが、この言葉に、皆で力を合わせて事を成すという願いを込めたと聞いた。矢巾キャンパスにいらしたら、ご覧いただきたい。



2008年8月号 (vol. 393) 表紙写真

大学HPでは2009年以降の大学報を閲覧できるので、それ以前の号についての思い出をいくつか紹介した。最後に、本誌500号の発行にお祝い申し上げ、読者の皆様、編集に関係されてきた皆様にお礼申し上げるとともに、今後のさらなる充実を祈念する。

「大学報の編集委員に推薦しておいたから、次から委員会に参加して下さい」。このような感じで、当時の上司に言われ早十数年たってしまいました。委員には医師、看護師をはじめ大学のいろいろな職種が集まり、現在は3人から4人1組の6グループでそれぞれの号を担当しています。私のグループは内容や校正については生物学科の松政先生、写真(特に表紙写真)については医用画像情報センターの畠山さんが中心になって進めていただいているので居心地がよく、更には企画調整課の担当の皆さんに的確にフォローしていただいてこれまでやっていくことができました。500号発行のお祝いとともに皆さんにこの場を借りて感謝を申し上げます。

現在、大学報は来年の新附属病院の矢巾移転を中心とした記事を多く掲載しておりますが、今後は職員一人ひ

とりの近況、大学や病院、仕事に対するご意見、ご感想、ぜひ皆さんにお知らせしたい事なども掲載できればと思っております。また、掲載内容についてアイデア等がございましたら最寄りの編集委員または企画調整課までご連絡をお願いいたします。

「岩手には四季があるからとてもいいところだよ」と関西から転居してきた知人が話していました。あたりまえと思っていた岩手の四季、冬は寒くて辛いと思っていましたが、実はとても恵まれているということに気づかされた一言でした。これからも岩手の素敵な四季などを織り交ぜながら多彩な大学報をめざしていきたいと思っております。

最後になりますが、大学報500号発行、本当におめでとうございます。編集に携わった皆さん、読者の皆さんに改めて感謝申し上げます。

表紙でみる本学の四季



vol.453



vol.432



vol.470



vol.438

第1回 岩手医科大学PEECコース が開催されました

3月18日（日）、木の花会館3階会議室において、第1回 岩手医科大学PEEC（Psychiatric Evaluation in Emergency Care）コースが開催され、日本臨床救急医学会と本学が主催となり、学会PEECワーキンググループのメンバーでコースコーディネーターの大塚耕太郎教授（神経精神科学講座）、コースディレクターの井上義博教授（救急・災害・総合医学講座救急医学分野）、学会担当委員で講師の日野耕介助教（横浜市立大学）らの指導のもとで、学内外17名の参加者が研修を修了しました。



講義を行う井上教授

このPEECコースは日本臨床救急医学会により開発された、救急医療における精神症状評価と初期診療を学ぶ教育コースで、東北では初の開催となりました。救急医療の現場において、精神症状を呈する患者さんに対する安全かつ安心な“標準的”初期診療ができるようになることを目指しています。

当日は救急医療に関わる医師、看護師、救急隊員、ソーシャルワーカー等の専門職が参加し、救急医療で模擬事例についてのグループディスカッションを通して精神疾患への具体的対応方法について理解を深めました。



グループディスカッションの様子
（後方最右席 高橋弘江師長）

認知症ケアチーム室が発足しました

平成30年4月から、本学附属病院に認知症ケアチーム室が発足しました。本学附属病院では、年々、BPSD（認知行動・心理症状）を伴う高齢患者の受診や緊急入院が増加していることから、専門知識を有した多職種が適切に対応して、質の高い医療を提供することを目的とし、当チーム室が設立されました。

当チーム室は、認知症治療に係る適切な研修を修了した医師と認知症認定看護師の他、認知症患者の退院調整の経験等を有する社会福祉士又は精神保健福祉士、薬剤師等により構成されています。病棟巡回による認知症患者に対するケアの実施状況把握や担当医師・看護師等とのカンファレンスを実施し、認知症患者が身体疾患の治療を円滑に受けられることを目指します。



後列左から

玉川事務係長（医療福祉相談室）、金子看護師（中3階）、菊池薬剤師（薬剤部）、小野薬剤師（薬剤部）

前列左から

工藤助教（神経精神科学講座）、金講師（内科学講座神経内科・老年科分野）、寺山教授（内科学講座神経内科・老年科分野）、佐藤看護部長、田村看護師（中6階）

脳死肝移植が行われました

4月1日（日）午後から2日（月）未明にかけて、脳死肝移植が行われました。

3月31日（土）に豊橋市民病院（愛知県）において、法的脳死と判定された40代女性の肝臓が、本学附属病院において日本臓器移植ネットワークに登録していた20代男性に対して移植され、手術は無事成功しました。

本学附属病院は、平成19年から開始した生体肝移植の実績が認められ、平成23年に国内23施設目の脳死肝移植認定施設となりました。その後、平成25年6月に第1例目の脳死肝移植を施行し、これまで11例の脳死肝移植を施行しています。

高度看護研修センター特定行為教育課程 開講式が行われました

4月7日(土)、創立60周年記念館10階会議室において、特定行為教育課程の開講式が行われました。

本学附属病院では、平成27年10月より「創傷管理関連コース」が創設され、今年度からは、「呼吸器関連コース」が新たに開設されました。また、共通科目では、平成29年度よりeラーニングが導入されており、働きながら各自のペースで学習することが可能となっています。

研修生代表挨拶では、第4期生となる今年度の研修生5名を代表し、橋本博明さんが「安全かつ効果的なケアを患者へ提供できる、高度かつ専門的な知識及び技術習得を目指すことを約束します」と決意を述べました。



3学部合同学生セミナーが行われました

4月21日(土)、矢巾キャンパスにおいて、3学部合同学生セミナーが開催されました。第6学年の必修科目となり2回目の開催となるこのセミナーは、医学部・歯学部・薬学部が共に学ぶ多職種連携教育の集大成として、5学年までに修得した専門知識と経験をもとに、事前に提示された症例を複数の学部の混成チームによりPBL(問題基盤型学習)形式で検討するものです。

当日は、患者さんへの説明を想定し、事前に各学部で検討した内容をもとに他の学部の学生と意見交換を行い、治療方針を共働でまとめました。専門知識を修得した学生が患者さんの立場に立ち、他学部の学生とともに治療方針の検討を行うことで、医療現場における多職種連携の重要性について理解を深めました。



平成30年度 薬学部白衣授与式が行われました

4月26日(木)、矢巾キャンパス大堀記念講堂において、薬学部白衣授与式が行われました。式では保護者や薬学部教員が見守るなか、三部薬学部長、小澤教務委員長、西谷実務実習部会長より、実務実習で臨床の場に第一歩を踏み出すこととなる薬学部5学年の学生に白衣が授与されました。実務実習は5月7日(月)から本県を含む東北地方の病院や薬局などで行われています。



また、学生を代表し、櫻直也さんが「私たちはヒポクラテスの医道規範に則り、高度で良質な医療の実践と、地域そして社会への貢献を目指し、勉学に励み、本学の建学の精神である「誠の人間」を目指します」と力強く宣誓しました。



学校法人岩手医科大学

平成30年度 事業計画

1. 背景と方針

本学は明治30年に創立者三田俊次郎が岩手県の医療の貧困を憂い、県都盛岡市の中心に位置する現在の内丸キャンパス敷地に私立岩手病院並びに医学講習所、産婆看護婦養成所を開設以来、「厚生済民」「誠の人間の育成」の精神の下、地域医療の発展及びそれを担う医療人の育成に一貫して取り組んできた。しかし、最新の生命科学に対応した教育・研究・医療を実践していくためには狭隘となったため、大学及び附属病院の総合移転整備計画を策定し、第一次事業として平成19年度に矢巾新キャンパスを竣工し、薬学部を新設、平成23年度には第二次事業として医学部・歯学部基礎講座を移転の上、統合基礎講座に改組するとともに、医歯薬総合研究所を開設した。平成29年度には看護学部を新設するなど、本学の歴史上、特筆すべき大規模な事業を展開し、昨年度からは最大の事業である附属病院の移転新築に着手した。

新附属病院は1,000床規模の入院・治療を中心とした特定機能病院で、患者様にやさしく、スタッフが働きやすい機能的な構造とし、平成31年9月の開院を目指している。一方、移転後の内丸には新棟建設を視野に入れつつ、当分の間は既存施設を利用した外来中心の高規格病院として内丸メディカルセンターを設置する。二つの病院は機能分化しつつ、一体的に運用することとしている。平成30年度は、其々の診療体制及びそれに基づいた機器・設備、人員、運用等詳細を確定させ、移転に備えたシミュレーションを行う。

教育面においては、18歳人口の減少に伴う大学進学者の減少、所謂「2018年問題」に直面し、優秀な学生の確保が各学部の存亡に関わる喫緊の課題となる。本学では数年前から歯学部、薬学部が定員を割り、また、国家試験合格率も各学部

で低迷するなど、極めて厳しい状況にあり、歴史ある大学として、全教職員で危機感を共有し、全学的に教育改革を断行していかなければならない。そして、医・歯・薬・看護の医療系総合大学として、各学部の垣根を取り払った連携教育・研究・診療を推進し、地方にあるからこそできる日本、更には世界に発信する大学を目指し、長期的な視野に立ち、直面する課題を着実に解決していく。

研究面においては、学長のリーダーシップの下で、本学の特色である四学部連携を活かして学問体系の壁を越えた研究体制を目指す。研究テーマは、各方面のステークホルダー（受益者・関係者）の意見をもとに地域のニーズに根ざしたものとし、研究成果は地域社会に還元して地域の経済・社会、雇用、文化の発展や深化に貢献することを企図する。多方面にわたって基礎生命科学および臨床研究を推進することで、Medical Center of Communityとしての大学ブランドの強化を図ることとする。

なお、移転事業をはじめ各事業の遂行には、多額の資金を要することから、本法人最大の収入源である医療収入の増収のため、平成30年4月に予定される診療報酬改定に戦略的に対応しつつ、患者紹介率、病床稼働率、DPC機能評価係数等の向上に努めるとともに、後発医薬品への切替えを一層促進する等、経費節減にも継続して取り組むこととする。

そして、社会情勢を見極めながら、各種補助金等の獲得や金融機関等からの資金調達も含めた中長期的な資金計画を立て、強固な経営基盤の構築を図っていくこととする。

以上の方針に基づき、平成30年度は次の重点事業を実施する。

2. 主要な事業計画

1 創立120周年記念事業関係

- 1 矢巾新附属病院新築工事及び病院付属施設の整備に係る計画推進
- 2 矢巾キャンパス研究室等改修工事の推進
- 3 内丸地区跡地活用計画の検討推進

2 教育・研究関係

- 1 医学部教育の質の向上と卒業時の教育成果達成に向けた対応
- 2 歯学部改革プロジェクトの推進と講義及び臨床実習の充実
- 3 薬学部における学修能力向上と教育システムの見直し
- 4 看護学部における設置計画の着実な履行と教育研究活動の推進
- 5 「ひらめき☆ときめきサイエンス」による小・中・高校生を対象にした薬学の啓発
- 6 マルチメディア教室の環境整備（5か年計画、2年目）
- 7 教職員の資質向上のための全学的なFD・SD推進事業
- 8 教学IR（Institutional Research）充実化事業
- 9 多様な就職先を実現するための支援
- 10 和漢古書整理
- 11 岩手看護短期大学の国家試験合格率の高位維持
- 12 医療専門学校の入学生の確保
- 13 医療専門学校の国家試験合格率の高位維持

3 補助事業及び委託事業関係

- ① 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の推進
(平成 26 年度～平成 30 年度)
- ② 私立大学研究ブランディング事業の推進
(平成 29 年度～平成 33 年度)
- ③ 私立学校施設整備費補助金による透過型電子顕微鏡の整備
- ④ 厚生労働行政推進調査事業費補助金による健康安全・危機管理対策総合研究事業(平成 25 年度～平成 32 年度)
- ⑤ 日本医療研究開発機構委託事業 認知症研究開発事業
(平成 28 年度～平成 32 年度)
- ⑥ 岩手県委託事業 災害時実践力強化事業
- ⑦ 矢巾キャンパスへの薬物毒物検査室移設
- ⑧ 岩手県こころのケアセンター運営事業
- ⑨ いわてこどもケアセンター運営事業
- ⑩ 岩手県ドクターヘリ運航事業
- ⑪ 東北メディカル・メガバンク計画

4 医療関係

- ① 附属病院移転後の診療体制等詳細の確定とシミュレーションの実施
- ② 医療収入の増収対策と経費節減の取組の継続
- ③ 矢巾新附属病院移転を見据えた病院部門システムの整備
- ④ 放射線治療装置更新

5 管理運営関係

- ① 附属病院移転に係る資金借入
- ② 矢巾地区基幹ネットワーク老朽化機器更新
- ③ 勤怠管理システムの導入
- ④ 高濃度 PCB を含む蛍光灯安定器廃棄処分計画 (継続)

6 施設設備関係

- ① 木の花立体駐車場解体工事
- ② 木の花会館南側外壁修繕
- ③ 6 号館煙突外壁修繕

※掲載内容は、平成 30 年度事業計画書を抜粋したものです。
詳細は平成 30 年度事業計画書及び本学ホームページ「情報公開」をご参照ください。

理事会報告 (3月定例ー3月26日開催)

- 1. 平成29年度補正予算について
- 2. 平成30年度事業計画について
- 3. 平成30年度予算について
- 4. 理事の職務担当区分について
- 5. 評議員の選任について
第4号評議員(新任) 三部 篤
第4号評議員(新任) 小笠原 邦昭
第4号評議員(新任) 佐藤 悦子
任期 平成30年4月1日から平成33年3月31日まで
(他の評議員の残任期間)
- 6. 教員の人事について
医学部 呼吸器外科学講座 教授
齊藤 元 (前 秋田大学大学院医学系研究科胸部外科学講座 准教授)
歯学部 口腔顎顔面再建学講座歯科放射線学分野 教授
田中 良一 (前 医学部放射線医学講座 特任准教授)
統合基礎講座 解剖学講座発生生物・再生医学分野 准教授
大津 圭史 (前 同分野 講師)
医学部 岩手県高度救命救急センター 特任准教授
藤野 靖久 (前 同センター 講師)
医学部 救急・災害・総合医学講座救急医学分野 特任准教授
照井 克俊 (前 同分野 講師)
(発令年月日 平成30年4月1日付)
- 7. 平成30年度一般寄付金の募集について
- 8. 学則の一部改正について
- 9. 組織規程の一部改正について
内科学講座糖尿病・内分泌内科分野の名称を内科学講座糖尿病・代謝・内分泌内科に名称変更すること、医療安全管理及び附属病院移転準備の体制強化を図るため、附属病院副院長を1名追加すること、臨床研究法の公布に伴い、支援体制の整備と臨床研究支援基盤の充実を図るため、治験管理センターを発展的に改組し、臨床研究支援センターを新設すること、現在歯科の口腔外科及び医科の耳鼻咽喉科・頭頸部外科において診療されている口腔癌症例について、診療窓口を一元化するため、耳鼻咽喉科・頭頸部外科から頭頸部外科を分離し、更に頭頸部外科医と歯科口腔外科医が協力して診療に当たる頭頸部腫瘍センターを新設すること、今後、増加が見込まれる認知症患者への適切な医療の提供と多職種関与による医療の質の向上を図るため、認知症ケアチーム室を新設すること、糖尿病・内分泌内科が、診療において代謝を担当していることを明確にするため、診療科名を糖尿病・代謝・内分泌内科に変更することとして組織規程を一部改正することについて承認
(施行年月日 平成30年4月1日付)
- 10. 就業規則の一部改正について



外科学講座 長谷川 康 助教がThe 34th Congress of the Pan-pacific Surgical Association Japan ChapterでWada Awardを受賞しました

この度、The 34th Congress of the Pan-pacific Surgical Association Japan Chapter (2月16日から18日にハワイで開催)において、Wada Awardを受賞しました。

演題名は「Technique of Pure Laparoscopic Left Hemihepatectomy - toward the gold standard」で、岩手医科大学で施行した腹腔鏡下肝左葉切除術の手術成績をまとめ、手術ビデオを提示しました。腹腔鏡下肝切除術は比較的新しい技術ですが、岩手医科大学では20年以上前からいち早く導入し、現在ではその分野のトップリーダーです。その業績を国際学会で発信できたことを光栄に思います。今後も腹腔鏡下肝切除術の発展に努めてまいります。最後に、ご指導していただいた先生方に感謝申し上げます。

(文責：長谷川 康)



(左：佐々木教授、右：長谷川助教)

外科学講座 梅邑 晃 助教がCongress of Asia Pacific Metabolic and Bariatric Surgery Society (APMBSS) で「Best Speaker Award」を受賞しました

この度、2018年3月29日から31日に東京で開催されたCongress of Asia Pacific Metabolic and Bariatric Surgery Society (APMBSS) において「Best Speaker Award」を受賞しました。APMBSSは、アジア太平洋諸国における減量外科手術の発展を目的として2004年に設立され、その後高度肥満症のみならず2型糖尿病をはじめとした肥満関連疾患の改善を目的としたメタボリックサージェリーを含めた国際学会として開催され続けています。今回発表した演題は「Diagnostic and therapeutic strategies of NASH in Japanese severely obese patients underwent laparoscopic sleeve gastrectomy」で、腹腔鏡下スリーブ状胃切除術を施行した高度肥満症例の非アルコール性脂肪肝炎 (NASH) の有病率や治療改善効果、病理学的所見の変化などを報告し、術後組織学変化を追うことが困難なNASHの病態を明らかにしたことが評価されました。受賞にあたり御指導、御協力頂いた皆様方に深謝申し上げます。

(文責：梅邑 晃)



(左：佐々木教授、右：梅邑助教)

大学院薬学研究科4年の六本木 沙織さんが日本薬学会第138年会 優秀発表賞 (ポスターの部) を受賞しました

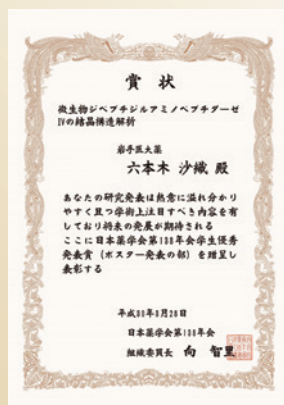
この度、2018年3月25日から28日に金沢で行われた日本薬学会第138年会にて、演題「微生物ジペプチジルアミノペプチダーゼIVの結晶構造解析」で優秀発表賞 (ポスターの部) を受賞しました。

ジペプチジルアミノペプチダーゼ (DAP、DPP) は、オリゴペプチドのN末端側からジペプチドを切り出すエキソペプチダーゼであり、多剤耐性菌や歯周病菌などの糖非発酵グラム陰性細菌の栄養源供給に関与します。発表では、X線結晶構造解析により明らかにしたDAP IVの基質認識機構、2型糖尿病治療薬のオフターゲットDPP8/9との類似性、抗菌薬や副作用の少ない2型糖尿病治療薬の開発への応用について言及しました。

この発表は、私にとって学生時代最後の発表となりました。何より嬉しいのは、チームで取り組んできたこの研究内容が客観的に評価され、将来の発展を期待してもらえたことです。

薬剤師養成を重視した6年制薬学部という、研究がなかなか推し進められない環境。その中で、私は人にとっても恵まれてきました。この場をお借りして、構造生物薬学分野の野中孝昌先生、阪本泰光先生、毛塚雄一郎先生、熊谷聡子さんに深く感謝申し上げます。みなさんと出会えたこと、そして一緒に過ごしてきた時間は、一生の宝物です。本当にありがとうございました。そして最後に、岩手医科大学薬学部のさらなる研究のご発展を、心から応援しています。

(文責：六本木 沙織)



まゆちゃんときくちゃんのお店めぐり

雑貨 & cafe 小綿商店 ～パンとコーヒー好きの方へ～

今回は、おいしいパンとコーヒーのお店を紹介します。お店がある場所は、上堂ホームマック店の駐車場に隣接した場所です。お店の名前は、ちょっとレトロな感じなのですが、「小綿商店」と言います。毎日、天然酵母で40～50種類のパンを作って販売しているお店ですが、こころを込めて作られたパンは、自然な甘みを感じられとても美味しいですよ。パンに合うよう工夫されたスープや、カレーとセットになったランチもおすすすめです。

コーヒーは、安比高原の焙煎職人がコーヒー豆の状態や性質を見極め、焙煎の深さを調整したコーヒー豆を使っているため、バランスがよくスッキリとした味わいです。その他、オーガニックハーブティーもあります。これはご自身で経営する牧場「ルーデンスファーム」で、種から育てたオーガニックハーブを1つひとつ手摘みし、丁寧に天日乾燥させてブレンドしているため、くせがなくとても飲みやすくなっています。

店内は、若いご夫婦がDIYしたとのことで、古着や雑貨・アクセサリなども取り扱っており、「ルーデンスファーム」の「昔たまご」も販売しています。ショーケースに並んでいるパンは、すぐに売り切れてしまいますから、持ち帰り用のパンを先に選んでおいて、ランチをするのがおすすすめです。

この時期は、パンとテイクアウトのコーヒーを持って、散策してはいかがでしょう。毎週月曜日は、川徳へも出店しています。

小綿商店 盛岡市上堂3-5-13

TEL 019-646-6543

営業時間 9:00～19:00

定休日 月・火曜日

月曜日は「農場作業」と「川徳本店」(地下1階プチデリカ11時から)へ出店のためお休みです。



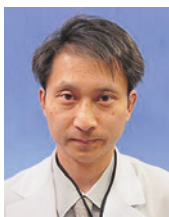
新任教授の紹介

平成 30 年 4 月 1 日就任

呼吸器外科学講座

齊藤 元 (さいとう はじめ)

昭和 41 年 10 月 19 日生
秋田県横手市出身



研究テーマ

・肺傷害、呼吸器外科学、磁性体を用いた温熱療法

主な著書論文

- ・小細胞肺癌に対する化学療法
(外科治療 2008 ; 98:222-8)
- ・磁性体を用いたがん診療
(Drug Delivery System 2014 ; 29 (4) :304-314)
- ・呼吸器外科周術期における口腔ケア
(胸部外科 2016 ; 69 (1) :14-19)

趣味

NFL 観戦

教職員への自己PR

このたび、呼吸器外科学講座の教授を担当させていただくこととなりました。今後は、当科教室員ならびに高度の技術・知識を有する学内関連部門の専門の先生方と力を合わせ、低侵襲手術を通じた高齢者や併存疾患をもつ方にもやさしい呼吸器外科診療を継続して提供していき、研究マインドをもった呼吸器外科専門医の育成も含め、岩手県の医療の発展に貢献したいと思います。

経歴

平成 3 年	秋田大学医学部卒業
	由利組合総合病院 外科
平成 5 年	公立角館総合病院 外科
平成 6 年	総合南東北病院 外科
	秋田大学医学部附属病院 医員
平成 9 年	ハーバード大学生理学教室 博士研究員
平成 12 年	秋田大学医学部附属病院呼吸器外科 助手
平成 15 年	同 講師
平成 25 年	秋田大学胸部外科学講座 准教授
平成 30 年 4 月	現職

平成 30 年 4 月 1 日就任

口腔顎顔面再建学講座歯科放射線学分野

田中 良一 (たなか りょういち)

昭和 40 年 9 月 2 日生
長崎県長崎市出身



研究テーマ

・CTを用いたサブトラクション法、血管疾患に対する血管内治療

主な著書論文

- ・CTを用いた末梢動脈疾患の非侵襲的評価に関する新たな開発:最新鋭の超高精細CTおよびサブトラクション法の経験 (Clin Radiol. 2018. Article In press. Open Access: DOI: <https://doi.org/10.1016/j.crad.2018.03.002>)
- ・胸部大動脈ステントグラフト治療時に同時に施行した腋窩—腋窩動脈バイパスによるアダムキュービッツ動脈への側副血行路の計画的温存 (Eur J Cardiothorac Surg. 2014;45 (2) :391.)
- ・冠動脈CT血管撮影における石灰化セグメントの評価の改善:冠動脈石灰化サブトラクション法の実行可能性調査 (Int J Cardiovasc Imaging. 2013;29 Suppl 2:75-81.)

趣味

電子工作、日曜大工

教職員への自己PR

この度、歯科放射線科の教授を拝命致しました。医科からの異動となりますが、医科における診療の継続と共に、これまでの経験を生かして歯科診療・研究・教育にお役に立てればと思っております。また、従来型のシステムによる医療情報の分散からの脱却およびベンダーロックインからの解放を目指し、システムの統合、活用に向けた環境整備にも引き続き邁進してゆきますので、皆様のご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

経歴

平成 2 年	大分医科大学 (現 大分大学) 医学部卒業
平成 4 年	同 医員
平成 5 年	国立循環器病センター レジデント
平成 10 年	国立循環器病センター スタッフ
平成 18 年	岩手医科大学放射線医学講座 助教
平成 20 年	同 講師
平成 25 年	同 特任准教授
平成 28 年	岩手医科大学総合情報センター 副センター長
平成 30 年 4 月	現職

大学報原稿募集

岩手医科大学報は、教職員皆様のコミュニケーションの場として発行を重ねていますが、さらなる教職員同士の“活発な意見交換の場”として原稿を募集しています。

岩手医科大学に対する意見や提言、日々の業務で感じること、サークル紹介、学報への感想など、幅広くお受けします。(表紙写真も募集しています)

また、特集してほしいテーマや、各コーナー(「表彰の栄誉」「トピックス」「教職員レター」など)への掲載依頼などお待ちしております。事務局までご連絡ください。

連絡先

大学報事務局(企画部企画調整課)
内線 7022
kikaku@j.iwate-med.ac.jp

シリーズ 職場めぐり

No.123

教養教育センター 化学科

化学科は、医療人に求められる化学の基礎知識と教養を身に着けられる教育・研究を目的に、昭和40年に(旧)教養部で化学教室として開設され平成19年の矢巾移転を経て現在に至っています。スタッフは現在、教授1名、講師1名、助教2名の計4名の体制です。

本学科の活動ですが、教育については、第一学年を対象とした理科準備教育から専門課程教育とのつながりを考慮した「ベーシック化学」、「専門課程への化学」、「化学実習」等の講義と学生実験を担当しております。研究活動については、機能性酸化物の固体化学的研究、マスト細胞の調節性分泌に関する研究、受容体刺激に関わる細胞内情報伝達の研究、天然物由来の生物活性物質の研究等、多様な研究が行われています。今後とも各学部・講座との連携をとり

ながら、スタッフの特徴を活かした教育・研究に取り組んで参りますのでどうぞよろしくお願いたします。

(助教 吉田 潤)



医学部教務課

医学部教務課は12名の職員で、「学部教育の運営」、「大学院教育の運営」、「研究倫理審査の支援」を業務の大きな柱として、多くの部署との協働のもとで仕事を行っています。

現在、医学部は近年の医師国家試験の結果を受け、大変厳しい状況にあります。現況の打開に向け、今年度初めて、教員と学生が一堂に集まる緊急決起集会を開催しました。緊急決起集会では教員と学生が医学教育の向上について議論を行い、活発な意見交換が行われ、意識の共有が図られました。

医師国家試験の合格率向上以外にも喫緊の課題として、「医学教育分野別評価の受審」、「特定臨床研究審査の体制整備」があります。

大学を取り巻く環境の変化を踏まえ、教員と事務職員の垣根を越えた取り組みが求められており、教員と事務職員

とが連携協力する、「教職協働」の重要性を認識し、この難局を乗り切ることができるよう取り組んでまいります。

(課長補佐 水戸 信博)



《岩手医科大学報編集委員》

小川 彰	佐藤 真結美
影山 雄太	菊池 初子
松政 正俊	工藤 正樹
齋野 朝幸	熊谷 佑子
藤本 康之	安保 淳一
白石 博久	佐々木 忠司
成田 欣弥	畠山 正充
遊田 由希子	藤村 尚子
佐藤 仁	武藤 千恵子
小坂 未来	高橋 慶
藤澤 美穂	

編集後記

今号は発刊500号の記念号です。これから来年の発刊60周年に向けて、附属病院移転という大事業が進む中で、全職員の情報共有の場として、大学報の役割がますます大きくなっているように感じます。

記事の中にありましたように、大学報も年々発展していますし、最近ではドローンで撮影した写真を掲載するなど、時代を感じさせる変化もあります。

私自身、編集委員としてよりも読者として大学報を楽しんでいるので、これまでも、これからも、大学報が届く日を楽しみにしています。

(編集委員 成田 欣弥)

岩手医科大学報 第500号

発行年月日 平成30年5月31日

発行 学校法人岩手医科大学

編集委員長 小川 彰

編集 岩手医科大学報編集委員会

事務局 企画部 企画調整課

盛岡市内丸19-1

TEL. 019-651-5111 (内線7023)

FAX. 019-624-1231

E-mail: kikaku@j.iwate-med.ac.jp

印刷 河北印刷株式会社

盛岡市本町通2-8-7

TEL. 019-623-4256

E-mail: office@kahoku-ipm.jp

スポット薬学講座

生物薬学講座生体防御学分野 教授 大橋 綾子



薬学における微生物

微生物学という、ウイルス、細菌、真菌、原虫など小さな生き物について学ぶ講義で、私は薬学生に「微生物は、三つの側面から薬学的に大変重要です」と紹介しています。

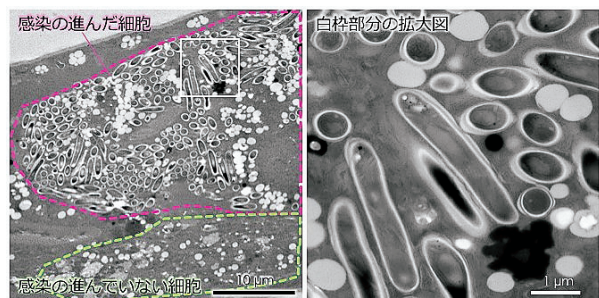
第一は、感染症をもたらす人類の「敵」としての微生物です。薬学の歴史は、抗生物質ペニシリンの発見に代表されるような、病原微生物と人類の戦いの歴史でもあります。よく効く抗生物質や抗ウイルス薬でも、一度耐性が出現すると、次世代の新薬開発が進み、新たな標的分子を持つ薬が登場します。薬学では、病原微生物の増殖や感染に加え、病原性出現や耐性獲得のメカニズムを学び、薬の作用を理解することが求められます。

次に、薬を生み出す「装置・道具」としての微生物です。様々な菌が医薬品のシード（種）となる二次代謝物を産生することは有名ですが、それ以外にも、遺伝子工学技術が利用できる細菌やウイルスは、「バイオ医薬品」の実用化に大きく貢献しています。数十年も前から、インスリンやインターフェロンのようなタンパク質製剤は、ヒトの遺伝子を大腸菌で発現するようデザインしてから導入し、生産されています。抗体医薬品も、抗体の遺伝子に人工的改良が加わったバイオ医薬品です。バイオ医薬品の先発品は、開発費が膨大なため極めて高価ですが、最近では「バイオシミラー」と称される後続品も登場するようになりました。

最後は、「共存者」としての微生物です。「あなたの体は9割が細菌（原著では10% Human）」という本が数年前出版されましたが、人体に常在する微生物は細胞数にして数百兆と推定されています。例

えば整腸薬としても使われるビフィズス菌は、腸内で我々に必要なビタミンの生成などを担っています。このような腸内細菌叢の善玉菌を増やす「プロバイオティクス」「プレバイオティクス」が注目される一方、先述の抗生物質（因みに英語では、アンチバイオティクスです）は、病原性細菌だけでなく、有用な腸内細菌まで排除してしまうことが問題となっています。また、多くの共生細菌が適度に免疫系を刺激するようですが、同じ常在菌でも定着組織によっては免疫応答を過剰に招き重篤な炎症を生じるなど、疾病との意外な関連も指摘されています。私たちの体を舞台に、まだ知らない微生物たちのドラマが展開しているようです。

最近、当分野の錦織助教は、盛岡で採取した線虫体内から新種の微胞子虫を発見しました。微胞子虫は、多くの動物を宿主とし、その細胞内に寄生する単細胞生物で、かつては原虫に分類されていましたが、今は真菌が特殊化したと考えられる新微生物です。古くはパスツールが絹産業に重要なカイコの病原体として指摘し、現在でも人畜共通感染症をもたらす微生物として注目されています。宿主の細胞と微生物たちはどのような対話をしているのでしょうか。謎の多い微生物に興味がつきません。



磐石川沿いで単離された線虫とそこに感染する微胞子虫（*P. moriokae*）